東京外国語大学オープンアカデミー教養講座（後期開講講座）

言葉とその周辺をきわめる

- 2 -

日　時：2013 年 10 月 8 日～11 月 12 日（毎週火曜日）19:00～20:30

会　場：東京外国語大学 本郷サテライト

受講料：9,000 円（全 6 回分）

受講者募集：9 月 1 日（日）～9 月 27 日（金）

申込み方法：所定の「受講申込書」にて E-mail、FAX、郵送のいずれか。

お申し込み：　8 月中旬以降、オープンアカデミーの Web サイトにて
お知らせします。

http://www.tufs.ac.jp/common/open-academy/

日程	講師	タイトル
10 月 8 日	藤縄康弘	ドイツ語：音楽から見る言語 ―言語から見る音楽
10 月 15 日	風間伸次郎	アルタイ諸言語：日本語に似た言語!? ―フィールドワークの現場から
10 月 22 日	浦田和幸	英語：語源散策 ―英語を取り巻く外国語たち
10 月 29 日	温品廉三	非漢字文化圏の言語・モンゴル語に入った漢語起源の語彙
11 月 5 日	鈴木信五	イタリア語とルーマニア語における語順の果たす役割
11 月 12 日	丹羽京子	ベンガル語：文語体から口語体へ

平成２５年度

東京外国語大学オープンアカデミー教養講座（後期開講）

「言葉とその周辺をきわめる」

- 2 -

企画：東京外国語大学 語学研究所

ご案内

このたび語学研究所では、「**言葉とその周辺をきわめる -2-**」をテーマに公開講座を開講することとなりました。

この講座では、言葉の単なる入門ではなく、講師自身が研究上興味を持って追究していること、フィールドワークのこと、言葉にまつわる事情、文字についてなど、講師それぞれのこだわりを持って独自の切り口で言葉の魅力を探ります。地球上の各地で言葉の魅力を追う言語学者の情熱に接してみるのはいかがでしょうか。

日程・講師

第１回　10 月 8 日（火）　「ドイツ語：音楽から見る言語 ―言語から見る音楽」
藤縄康弘　東京外国語大学准教授

第２回　10 月 15 日（火）　「アルタイ諸語：日本語に似た言語!? ―フィールドワークの現場から」
風間伸次郎　東京外国語大学教授

第３回　10 月 22 日（火）　「英語：語源散策 ―英語を取り巻く外国語たち」
浦田和幸　東京外国語大学教授

第４回　10 月 29 日（火）　「非漢字文化圏の言語・モンゴル語に入った漢語起源の語彙」
温品廉三　東京外国語大学講師

第５回　11 月 5 日（火）　「イタリア語とルーマニア語における語順の果たす役割」
鈴木信五　東京音楽大学教授

第６回　11 月 12 日（火）　「ベンガル語：文語体から口語体へ」
丹羽京子　東京外国語大学講師

- いずれも火曜日、19:00～21:00（質疑応答を含む）
- 専門知識・予備知識は必要ありません。
- 教材は各回ごとに配布します。教材費は不要です。
- ６回全回受講された方には最終回に受講証書を授与します。ぜひ全回御出席ください。
- 毎回教室入り口の受付において出席を取ります。
- 記録保存のために、セミナールーム後方から講演の様子を撮影させていただきます。どうかご了承ください。

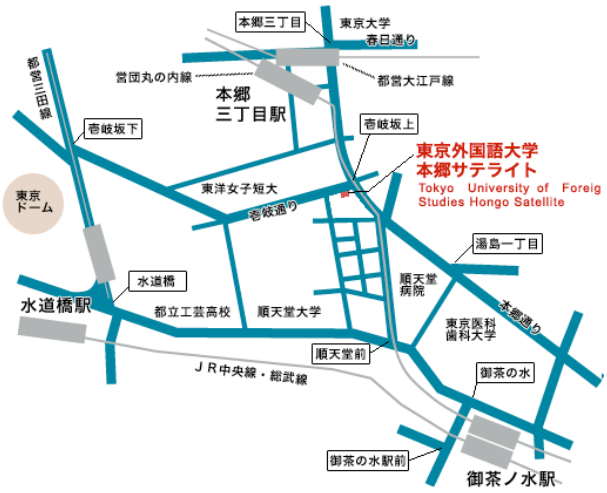
会場

東京外国語大学 本郷サテライト ３階セミナー室

〒113-0033　東京都文京区本郷 2-14-10　（駐車場はございません）

http://www.tufs.ac.jp/access/hongou.html

- 都営バス：　本郷二丁目停留所　徒歩１分
- 東京メトロ丸ノ内線：　本郷三丁目駅（M21）２番出口下車徒歩３分
- 都営地下鉄大江戸線：　本郷三丁目駅（E08）５番出口下車徒歩４分
- 都営地下鉄三田線：　水道橋駅(I11)　A1 出口下車徒歩６分
- JR 線：　御茶ノ水駅　お茶の水橋口下車徒歩７分



お問い合わせ先

東京外国語大学

〒183-8534　東京都府中市朝日町 3-11-1

受講申込みについては…

⇒⇒ 総務企画課広報係

Tel：042-330-5823 / Fax：042-330-5140 / E-mail：tufs-openacademy@tufs.ac.jp

ホームページ：http://www.tufs.ac.jp/common/open-academy/index.html

講座の内容については…

⇒⇒ 語学研究所

Tel：042-330-5407 / Fax：042-330-5408 / E-mail：gkkfzogi@tufs.ac.jp

ホームページ：http://www.tufs.ac.jp/common/fs/ilr/index.html

各回の概要

第1回　10月８日（火）
「ドイツ語：音楽から見る言語 ―言語から見る音楽」
講師：藤縄康弘　東京外国語大学准教授

ドイツ語は国内外を問わず学習者人口の多い、いわゆる「メジャー」な言語のひとつです。ドイツ語圏は、文芸、思想、科学、音楽、演劇など、文化の面で重要な位置を占めており、特に我が国では、こうした文化的側面への関心がこの言語を学習する動機となるケースが珍しくありません。そうした意味で、本講座においてドイツ語を取り上げるにあたっては、愛好者がことのほか多いと思われる音楽との関わりという視点からお話をしてみたいと思います。

音楽については、しばしばメロディ、リズム、ハーモニーがその三要素として挙げられますが、果たしてこれに相当する言語（ドイツ語）サイドの現象は何でしょう？ それらは実際、音楽の要素と何を共有し、どんな違いを持っているのでしょう？ そもそも、こうした言語と音楽との比較は、所詮、単なる喩えに過ぎないのでしょうか？ それとも言語（ドイツ語）の何か本質に触れる契機となるのでしょうか？

限られた時間ではありますが、いくつか事例を紹介しながら考えてみたいと思います。

第２回　10月15日（火）
「アルタイ諸言語：日本語に似た言語!? ―フィールドワークの現場から」
講師：風間伸次郎　東京外国語大学教授

アルタイ諸言語は、チュルク、モンゴル、ツングース、の３つのグループからなっています。それぞれのグループの中は、さらに10や20の言語に分かれています。私の夢はそれらの言語の話されている地域の全てに出かけて現地でその言葉に触れることです。

今回の講演では、これまで私が訪れたところの写真等も多くお見せして、現地調査の状況を見ていただこうと思っています。アルタイ諸言語は、文法構造などが日本語とよく似ている、と言われています。さて本当に似ているといえるのか、起源的には果たして何らかの関連があるのか、まだまだわからないことは多く、一回一時間半のお話ではなかなかそこいらへんの問題まで詳しくお話しすることはできないとも思いますが、そんな言葉を話している人々がどこでどんな暮らしをしているのか、その一端に触れていただければ幸いです。

第3回　10月22日（火）

「英語：語源散策 ―英語を取り巻く外国語たち」

講師：浦田和幸　東京外国語大学教授

現在では国際語として世界中で用いられる英語も、元は小さな存在に過ぎませんでした。ルーツは、5世紀半ばに、現在のドイツ北東部からユトランド半島のあたりに住んでいたゲルマン人（アングル族、サクソン族、ジュート族等）がブリテン島に渡り、先住のケルト人を追放して定住したことに遡ります。その後、英語はブリテン島の地で育まれ、近代期に入ると、イギリスの海外進出とともに世界中に移植され、さらに、20世紀には、アメリカ合衆国の発展とともに大きく成長しました。そのような過程で、英語は様々な言語から語彙を借用し、借用元は 350 言語以上に及ぶと言われています。英語が大陸時代から受け継いだ本来語、ブリテン島に渡ってからの言語接触（ケルト語、ラテン語、北欧語、フランス語）、ルネサンスの影響（ギリシア語、ラテン語）、その後、大航海時代以降の様々な言語からの借用の様子などを眺めながら、語源の森を散策してみたいと思います。

第4回　10月29日（火）

「非漢字文化圏の言語・モンゴル語に入った漢語起源の語彙」

講師：温品廉三　東京外国語大学講師

― 準備中です ―

第5回　11月5日（火）

「イタリア語とルーマニア語における語順の果たす役割」

講師：鈴木信五　東京音楽大学教授

突然日本語の話で恐縮ですが、次の２つの文がどちらも正しいことは、日本語話者だったらすぐにわかります。

（1）　一郎が花びんを割った。

（2）　一郎は花びんを割った。

ところが、「一郎は何をしたのか」という問いに対しては、（1）は答えとして失格です。

さて、イタリア語やルーマニア語は、よく語順が自由な言語だと言われます。事実、ルカという少年が花びんを割ったという事実を表すのに、主語Ｓの位置の違いを考えただけでも、それぞれ３通りの語順が許されます（以下、動詞Ｖは太字で示します）。

イタリア語：	（3）	Luca **ha rotto** il vaso.	SVO
	（4）	**Ha rotto** Luca, il vaso.	VSO
	（5）	**Ha rotto** il vaso Luca.	VOS
ルーマニア語：	（6）	Luca **a spart** vaza.	SVO
	（7）	**A spart** Luca vaza.	VSO
	（8）	**A spart** vaza, Luca.	VOS

しかし、このうち、「ルカは何をしたのか」の問いにふつうのイントネーションで答えられるのは、両言語とも語順がSVOの文（3）、（6）だけです。このことからわかるのは、両言語とも語順が話の流れのなかで決まるので、通常言われていることとは裏腹に、むやみに語順を入れ替えてはいけない、ということです。

講義では、こうした語順決定のメカニズムを探りながら、イタリア語とルーマニア語における語順の果たす役割について考えてみたいと思います。

第6回　11月12日（火）

「ベンガル語：文語体から口語体へ」

講師：丹羽京子　東京外国語大学講師

ベンガル語は、1000年ほどの歴史を持っていますが、公用語として用いられるようになったのは比較的最近で、それ以前はもっぱら文学によって牽引されてきたと言ってもよいでしょう。そのベンガル文学では、1910年代に文語体から口語体へとことばの上での大きな変換が起こり、その際、若い世代がもっぱら口語体で作品を書くようになったのみならず、ノーベル賞詩人タゴールのように文語体でそのキャリアをスタートさせた世代も、積極的に自らの用語を口語体へと切り替えていったのです。

タゴールが初めて完全口語で書いた小説、『家と世界』は当時の読者に大きな衝撃を与えましたが、それは口語というスタイルによってもたらされた部分も少なくありません。また、韻律を大切にする詩の世界では、口語で書くにあたって乗り越えなければならないさまざまな問題もありました。

本講座では、そのような文学の世界でのことばの変化、それによってもたらされたもの、失われたもの、試行錯誤などの文学史上の一コマをご紹介したいと思っています。